ハニー

husa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハニー

【Ｎコード】
Ｎ７５６８Ｏ

【作者名】
ｈｕｓａ

【あらすじ】
中絶経験をもつ高校２年生のメイ。
それを支えてくれる新しい恋人のハニー。
大好きな彼氏、だがハニーに対しての不安はたかまるばかり。
付き合っていても孤独を感じ続けるメイは・・・

ハニー（前書き）

少しグロテスクな表現があります。
苦手な方は注意してください。

ハニー

芸術とは一体なんだろうか。
私は表彰式の時にもらった、高校生の書くキャプションを読んでいた。
馬鹿馬鹿しい言葉が並べられている。どれも、大人じみた背伸びしたような文章ばかりだ。
私はいつもこういう文章を上から目線でしか読めない。
この表彰式では外国からの受賞者も多く、他の国から来た高校生のキャプションも書いてあった。
なにが、感銘された、だ。なにが、影響を受けた、だ。
まったくふざけた文章しかない。
得に外国人の文章は現実みがなく納得のかない文章だ。
私はその文章を机の上に投げつける。
そしてその、馬鹿げた、ふざけた文章を私は今必死で書いている。

私の理解している芸術とは、一般の人にでも素敵だと思える具体的なもの。それをいかに自分の心情、描きたいものに変えてくかだ。
形の分からないものに価値はない！
使えないものに価値はない！
それと同じだ。
確かに私は絵を描くが、それは趣味とか、将来デザイン関係の仕事に就くためのものであり、自分の感情を込めることはあるが、人に理解されようと思ったり、何がどうであってこの作品を作ったことや、この作品を通してなにかを象徴するということを伝えたいという気はまったくない。
賞をとって、自分の作品が周りに認められること、褒めてもらうことは光栄に思うが、このキャプション・・・つまり、自分の作品についての説明や感想を言えと言われるととても困るのだ。

第一、この美術展の会長が気に食わない。
確かに作品に、自分の精一杯のもの、感情を込めることはあるが、自分の描きたいものを描いているだけなので、得に具体的に伝えたいものはなにもない。
平和を象徴？ゆったりとした空間？
描きたいと思ったものを描いていたんだから、そんなもの考える暇などない。
今日も、大好きな彼氏のことを考えて寝たかったのだが、明日までにこの「キャプション」という名の難題をクリアしなければ、いい加減２週間ほども待たせた先生の堪忍袋の緒が切れる。
文字を書くたび、私は、なにか綺麗ごとを言っているようで、手が進まないのだ。自分の納得のいくような文章は到底書けないだろう。
テーマ・・・テーマと言われても、私の作品にはテーマがない。
それに、自信のない作品だったので、なにも考えずに制作したものだ。その場の感情で、表情は寂しくなったり、テンションが高い日は背景は明るい色になった。
こんな絵が評価されるなんて・・・。
正直複雑だ。
昔から、私の自信のない作品が評価される。とは言っても自信のある作品を作ったことはまったくない。
ああ、もうどうすればいいのだろう。
私の馬鹿げた文章は、一体何人の人に読まれるのだろう。
「はあ。」
私はため息をつき、携帯の待ちうけにうつる、彼を眺めた。
私のハニー。なんて可愛いんだろう。こんなくだらない作品のくだらないキャプションを考えるより、私の愛する素敵なハニーの素敵なキャプションを考えたい。
素敵すぎる。
そう呟いて、私は、携帯をしまった。
彼、ハニーこと、にゃんここと、リョウ君は、私の彼氏である。

可愛い顔立ちなので私の中でハニーと呼んでいる。
彼は私の全てを受け入れてくれる！
とは、言っても付き合い始めてまだ、一週間程度だが。
そういえば、付き合ってからデートをしていない。キスもしていない。だから、私は今こんなに荒れているのだろうか。
まだ、私は彼に「好き」とも言っていない。
なんで、私はこんなにも彼が好きなんだろう。いや、彼のことが本当に好きなのかは分からない。
もしかすると、彼が私の芸術かもしれない。
今までまともな恋愛をしたことのない私が彼に夢中だ。
中絶した私を、彼は優しく受け止めてくれた。酷い元彼の話を聞いて彼は泣いてくれた。私の頭を優しく撫でてくれた。愛らしい猫でもあつかうかのように彼は私を見つめる。
彼こそ芸術だ。美だ。愛だ。
今すぐ彼を抱しめたくなったが、今ここに彼はいない。だから、明日学校で沢山話そうと思っているのだが、そのためにはこの熱を治さなければいけない。
ああ、もうなんて私は不幸なんだ！
今したいこともできないなんて！

なんとなく完成された私の１５０字のキャプションは、小学生並の出来栄えであった。
後は先生に任せよう。と考えたのだが、きっと先生はとてつもなくキレるだろう。「こんな馬鹿げた文章」とか「小学生じゃあるまいし」などなど。さっき私が考えていたことと同じことを思うのだろう。
それに対して私は「ああ・・・」とか「はい・・・」とか「ええ・・・」とか「頑張ります・・」と答えるのだろうけど、正直こんなくだらない文章に力を入れるほど私の脳は発達していない。
残念だが、私の文章への才能はさっき使い果たしたので、明日活躍

できる発想力はこれっぽちも残っていない。
残った体力と気力と愛情とテンションは全てハニーに捧げることにした。
文章を書いているときに気付いたのだが、私のボキャブラリーの少なさは相当らしい。そして、憎しみと悲しみとテンションしかこもっていないこの作品を高く評価し、感想や説明を書くというのは私には不可能だった。
同じことを何度も繰り替えした文章を読み終え、私は「うん」と頷いてファイルに閉じた。
こんな私の頭でもいちお文章は書けるのだと関心をし、寝る準備をする。
今日も大好きなハニーの夢を見れますようにと、苦笑しながら。

ハニー（後書き）

初投稿ということもあり未熟な部分がたくさんあります。
意見感想、あと間違えなどがあれば気軽に声をかけてください。

私には

六時半起床。
いつものように鏡の前へ座り、化粧をする。
大好きなハニーに会えるのを楽しみにしながら、私は化粧をするのだ。
大事なキャプションを鞄にしまい、私は自転車にまたがった。
学校へ到着すると、ポーカーフェイスのハニーが椅子に座っていた。
私はその彼に対して「おはよう」と言うわけでもなく、自分の席へ座る。
面倒くさいのではなく、教室ではなるべく話さない。これが私達のルールとなっている。どっちが言ったわけでもないが、どうもそういう感じになった。ただ恥ずかしいだけなのだろうか。
私は以前に付き合った人に対して恥ずかしいと思ったことがない。
ましてや、彼の前ではありのままの自分をさらけ出す方だ。
なぜだろう。この感情は私にとって不思議すぎて、不安になる。
彼が一度も付き合ったことがないことに対して私は、遠慮をしているのだろうか。それとも、彼のことがとてつもなく好きで、嫌われるのが嫌なだけだろうか。
そんなことを考えながら、私は美術研究室へ向かい担当の教師にキャプションを見せた。
「・・・・・。」
「・・・だめ、ですか？」
面倒くさそうにそう言うと、あっさり「いいよ。」という返事が返ってきた。
一、二箇所直されたものの、内容事態は完璧だといわれた。自分は無駄な労力を使ってしまったのだ
と落ち込みながら、青書に取り掛かる。
なぜだ！なぜこんな文章が評価される！

馬鹿馬鹿しい、なぜ私がこんな大嫌いな文章を書いて褒められなければならないのだろう。
シャーペンを握り、イライラしているとハニーが目の前に現れた。
こんなイライラした私を見られたくないと思い、いつもの笑顔で「何？」と答える。
「ん？何書いてんのかなって思って。」
「ああ、私の絵がオーストラリアに行くことになったから、そのキャプション。」
「凄いね、メイは。」
彼は少し微笑み私の頭を撫でながら、キャプションを手にとった。
彼はまた微笑んで「綺麗な字だね。」という。
私は興味なさそうに「羨ましいでしょ」と返事をすると、彼は楽しそうに私を眺めた。
ああ、なんて心地よい空間なんだろう。
私はこの17年間この感覚を求めていたのかもしれない。そう思わせるほど、彼の空気はとても穏やかだ。
時々彼を見ていると何をしても許されそうな気分になる。
このふわふわとしたぱこぱことした世界はいつまで私の近くにいるのだろう。
そう思うと少し不安になった。
彼に向かって「愛してる」と言おうとしたが、「あぃ・・・」という微かな言葉が私の口から漏れるだけであった。もしかして、私は彼を愛していないのかもしれない。
放課後になり私達はアトリエに向かった。
油絵の具を準備し、自分の絵の前に座る。
このカピカピに乾いたキャンパスの上の絵の具のように私の今の心は冷めていて、それでいてこの絵の具のように鮮やかだ。
ハニーは私の隣に座り「メイは上手いね。」と言った。
「上手くないよ。私は満足した絵が描けない。」
そう呟きながら、髪を結び直した。

「メイちゃんは十分だと思うけどー。」
いつの間に隣にいた、友達のリンちゃんがそう言った。
「リンちゃん、ありがとー。」
私は微笑んでそう返す。するとリンちゃんはいつものように私の頬にキスするふりをした。
リンちゃんはニヤっと笑い、ハニーの方を見る。
「リョウくんはできる？チュウ。」
ああ、そういえば私達はキスをしたことがない。
「え、あ・・・え？」
挙動不審になるハニーを眺めながら、私は笑った。彼は見ているだけで面白い。
なんて素敵な人なんだ！
「ほっぺにチュー。メイちゃんの。」
「で、できるよ・・・。」
意地になってハニーはそう言った。
しかし、少し困っているハニーを見て「はずかしいけん、やだ。」とそっけなく返す。
「やっちゃいなよ～。今日しちゃったら？私がいないことでいいし。」
そう淡々と答えるリンちゃん。私はなぜか笑って誤魔化した。
別にキスが恥ずかしいわけではない。なんというか、今はそんな気分じゃないのだ。
アトリエには、私とハニーとリンちゃんの三人しかいない。
私はこの空間が好きだ。
ハニーと二人でいるより、三人でいる方が、なぜか安心してハニーにいつもよりボディタッチができる。手を繋いだり、もたれかかったり。
まだ、馴れていない私達はそうすることが精一杯だが、その小さな精一杯でも私には心地よく感じたし、とても安心できた。
私の今までの付き合い方はこんな新鮮ではなかった。

会っては体を触り合いセックスを何度もしていた。前は随分と「お前は足を開くことでしか男を喜ばせれない」と馬鹿にされた。それに対して私は否定ができなかった。そうなのかもしれない。でも、それで喜んでんのは男だろ？セックスしたらなんだよ。他になにで喜ばせれるって言うんだ。
そんな付き合いが正しいなんて思ってはいない。
男は体しか求めていない。それがたまたま、私が相手なだけだ。
そう思っていた。
前の彼氏の北岡さん。
私より四つ上のバイトで知り合った人だった。彼と付き合いはじめると、愛を感じていた。
最初の方は。
しだいに彼の束縛は強くなり、合うたびセックスを要求される。
「好きなんだから、相手の体を触りたいって思うのは当たり前だろ。」
そう言われ断ることをしなかった私。
彼は私が反抗すると「殺す」と言った。最初は脅されているだけだと思っていたが、「別れたい」と言ったある日彼は、夜中に私の家の外に立っていた。
恐怖のあまり謝り続ける私。彼は私を本気で愛していた。
でも、私には理解ができない。
セックスをするたび「早くイケ」と思った。この苦痛がすぐ終われば いいのに。外で無理矢理されて半泣きになった。早くイけ。イけよ。どうせ私は男の性欲を解消する体でしかないんだ。私の体は彼にとってただの玩具だ。穴につっこんでイければいい。気持ちよければいい。そんな考えでしかない男だ。
彼に抵抗できなくなった日、私は妊娠した。
「産め」と何度も彼に言われたが私にはしたいことがある、高校を辞めるつもりはない。
それを彼に伝えると「お前の腹を殴っておろしてやる」と言われた。

結局耐え切れなくなり、おろすことになった。
エコーが現像され「ここが赤ちゃんの入っている袋です。まだ袋しかできてないね。」と医師に説明される。それさえも愛しく思えた。
大嫌いな彼の赤ちゃん。それでも、私の大好きな赤ちゃん。
「施術に必要なものをここに書いておきます。」そう渡された紙を破ってやりたい気持ちになった。
施術当日。私は、施術室に案内された。お尻に注射を打たれた後、手首に麻酔を打たれる。「麻酔打ちますね。肩に来るまで痛いけど、我慢してね。」言われたとうり、私の左腕はとてつもなく痛くなった。この痛みが、涙と引き換えになればいいのに。
小さな生命は短時間であっけなく私のお腹から消えていった。私は1人の未来を奪ったのだ。この赤ちゃんは痛みを知らずに死んでいく。
自分の愚かさに、残酷さに・・・なによりも小さな命より自分の夢や希望を選んだ私を憎んだ。
玩具にされた私の体でも、小さな命をつくる大事な体だと初めて知った。
友達は「それはメイちゃんにとって正解だと思うよ。辛かったね。」と言ってくれた。私は確かに辛い。でも殺された赤ちゃんはもっと辛いのだろう。いや、辛いということを知らずに死んでいった。
ハニーは泣きながら私の話を聞いてくれた。
そんな私を好きになってくれたハニーを、私は愛したい。

私には（後書き）

まさかこの話を人にみせるとは思ってもみませんでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7568o/

ハニー

2010年11月7日20時32分発行